在宅勤務の俺は、毎日同じ時間にインターホンが鳴るのを、どこかで待っている自分に気づいていた。

配達員はいつも同じ男だった。肩幅が広くて、制服の袖が少しだけ窮屈そうで、荷物を差し出す手が異様に大きい。

（なんて、かっこいい人なんだろう。名前も知らないけど、この人がいるから俺も仕事の息抜きになってるところあるんだよな、眼福……いや、もっとだ。彼の存在が、俺の毎日の光になっている。）

「サインお願いします」と言う声は低くて、無駄な言葉は一切ない。俺が「ありがとうございます」とだけ返すと、彼は軽く会釈して、もう次の配達先へ向かっている。

それだけの関係だった。

（もっと話したい。もっと彼のことを知りたい。でも、俺なんかが話しかけても、きっと迷惑だろうな……。この距離感が、今は一番いい。いや、でも……）

でも、ある雨の日。いつものように荷物を受け取ろうと玄関を開けると、彼はいつもと違って、玄関のたたきに一歩だけ踏み込んだ。

「すみません、今日は雨なんで、ここで」

そう言って、俺が濡れないようにと、屋根のある位置まで荷物を持ってきてくれたのだ。

その小さな気遣いに、なぜか胸が温かくなった。

（俺のこと、気遣ってくれてる？ こんなに些細なことなのに、彼の優しさが心に沁みる。ああ、この人が俺のことを見てくれてる。その事実だけで、俺はもう舞い上がってしまいそうだ。）

彼の低い声と、大きな手と、無駄のない動作を、俺は無意識に見つめていた。

（この手が、いつか俺に触れることがあったなら……そんなことを考えて、顔が熱くなる。そんな日が来ることは永久にないのにな。）

配達員はそれに気づくと、ほんの少しだけ口元を緩めて、「じゃあ、また明日」と言って雨の中へ戻っていった。

また明日。最近通販でまとめて買い物をしたからだ。複数のショップから商品を購入したから配達日がずれている。それだけなのに、俺の心は高ぶっていた。
（また明日！？ 俺にそう言ってくれた！ 彼が明日も来てくれる。その言葉だけで、明日まで生きる意味が生まれる。もう、俺は完全に彼に夢中だ。）

次の日も、雨が降っていた。

いつもの時間にインターホンが鳴り、俺が玄関を開けると、配達員は昨日と同じようにたたきに一歩だけ踏み込んで荷物を差し出した。だが今日は、その手が少しだけ濡れている。雨だけではない。梱包が、破れていた。

「……すみません」

配達員の声が、いつもより低い。

（彼が謝ってる？ そんなこと、俺は全然気にしてないのに。むしろ、彼がこんなに近くにいてくれるだけで……）

「雨で、段ボールが」

俺が受け取ろうとしたその瞬間、破れた隙間から、中身がこぼれ落ちた。

小さなボトル。シリコン製の吸引バイブ。そして—「カントボーイ用興奮剤」と書かれたパッケージ。

世界が止まった。

（……は？）

配達員は無言で、落ちたバイブを拾い上げた。その大きな手のひらに乗ったそれが、やけに卑猥に見えて、俺は言葉を失った。

「あの、これも落ちてます」

彼が差し出したバイブを受け取ろうとして、指が震える。

（やばい、終わった。俺全部終わった。どうしよう、このまま逃げ出したい。でも、嫌われたくない。彼に、俺の全部を受け止めてほしい。この人が、俺のこの隠された部分を知っても、まだ俺を見てくれるなら……）

何か言わなければ。違うんです、これは違うんです—でも、違うとは何なのか。全部、俺が注文したものだ。

「……俺」

声が震える。顔を上げられない。でも、ここで逃げたら、もう二度とこの人に顔向けできない。

「俺……カントボーイで……」

最後まで言う前に、配達員が小さく笑った。

「知ってる」

え、と顔を上げた俺を見て、彼はもう一度、今度はもっと優しく笑った。

（知ってる……？ 嘘だろ？ いつから？ ずっと？ その言葉が、まるで俺の凍り付いた心を溶かすみたいに、じんわりと温かさを広げていく。彼が、俺の、この秘密を知っていた？ それで、嫌わずに、こうして目の前にいてくれている？ なんだ、これ。）

「ずっと前から、知ってた。お前が注文する荷物、たまに箱が破れてて。でも、言えなかった」

「……なんで」

「お前が、嫌がるかと思って」

雨音だけが、玄関に響く。配達員はバイブを俺に渡すと、一歩だけ後ろに下がった。

「秘密は守る。だから、安心して」

そう言って、彼は帰ろうとした。でも、その背中を見て、俺は思わず声をかけていた。

「待って」

配達員が振り返る。俺の心臓は、もう壊れそうなくらいに鳴っていた。

（ああ、もう、止まらない。止められない。彼に、この人に触れてほしい。俺のこの、誰にも言えなかった秘密の部分を、彼の大きな手で優しく包んでほしい。これは、もう、お願いなんかじゃない。俺の、心の底からの叫びだ。彼になら、どんなふうにされてもいい。むしろ、彼がいい。彼じゃなきゃ、だめなんだ。）

「……もしよかったら」

配達員が言いかけた言葉を、俺は遮るように続けた。

「触って、ほしい」

配達員の目が、わずかに見開かれる。雨の音が、やけに遠くに聞こえた。彼はしばらく黙って俺を見つめてから、たたきに上がり込んだ。玄関のドアが、静かに閉まる。

「ここで、いいのか」

「……はい」

（彼が、本当に俺に触れてくれる。この人が、俺の全部を受け止めてくれる。もう、どうなってもいい。彼の好きなようにしてほしい。）

玄関の鍵を閉めた瞬間、外の雨音が少しだけ遠くなった。狭いたたきに二人きり。

（こんな狭い玄関で、彼と二人きり。心臓が、もう喉から飛び出しそうなくらい鳴ってる。彼の存在が、部屋の空気を全部彼の色に染めていくみたいだ。この人の熱が、匂いが、俺の全てを奪っていく。ああ、なんて幸せなんだろう。俺は今、彼に触れてもらっているんだ。）

靴を脱ぐのももどかしく、配達員が俺の肩に手を置く。その手のひらの熱が、薄いシャツ越しにじんわりと伝わってきて、心臓が早鐘を打ち始める。

「ここ、段差あるから」と彼が言い、俺の身体を壁際へ導く。配達員は廊下に膝をつき、俺はたたきに立ったまま、ちょうど彼の顔が俺の腰のあたりにくる格好になった。制服のナイロン生地がカサカサと擦れる音が、静かな玄関に妙に大きく響く。

「この体勢、ちょっと恥ずかしいんですけど」

（でも、彼とこんなふうに向き合ってるなんて、それだけで胸がいっぱいだ。）

「でも、お前が立ってるほうが、何かあった時にすぐ動けるだろ」

何かあった時—誰か来た時、という意味だとわかるのに、彼がそんなことを考えるのが嬉しかった。

彼の大きな手が、俺のスラックスのウエストにかかる。布地が腰骨の上をするすると滑り落ち、下着も一緒に膝まで下ろされた。外気がひんやりと股間を撫で、思わず太腿に力が入る。

「……寒いか」
「ちょっとだけ……でも、平気」

配達員は答えずに、自分の手のひらをこすり合わせて温め始めた。大きな手のひら同士が擦れる、ざり、ざり、という無骨な音。

（彼の指は、毎日荷物を運ぶために使われている。その手が、今から俺に触れるんだ。俺のためだけに、温められているんだ。）

そして十分に温まった手で、俺の太腿の外側をそっと包み込む。冷えた鳥肌が、彼の体温でじわじわと溶けていく。

「あったかい……」

（彼の大きな手で、俺の足が包まれる。この温かさが、俺の心も温かくしていく。）

「手、冷たいかと思った」
「冷たくない。すごく、気持ちいい」

（彼の手が、こんなにも俺に安らぎを与えてくれるなんて。もう、このまま彼の手に包まれていたい。）

間接照明が、俺の股間をぼんやりと照らしている。自分でもわかるほど、もう濡れていた。ヒダの内側にうっすらと滲んだ愛液が、光を受けてかすかに光っている。彼の目が、そこに注がれているのを感じて、腹の奥がきゅんと疼いた。

（彼に、俺のこの恥ずかしい部分を見られている。でも、彼なら許してくれる。彼なら、俺の全てを受け止めてくれる。）

「きれいだな」
「……そんなとこ、見ないでください」

（恥ずかしい、けど、嬉しい。彼に、俺のこの一番秘密の場所を「きれい」だと言われるなんて。この人が、俺のこんな汚い部分まで肯定してくれる。その事実だけで、俺はもう、彼に全てを捧げたくなっていた。）

「見るなって言われても、もう見てる」

彼の右手が、ゆっくりと持ち上がる。指が触れるか触れないかの距離で一瞬ためらって、それからそっと、俺の割れ目に触れた。まだヒダの外側、大陰唇の一番やわらかい部分。彼の指先は思ったより少しだけ硬くて、でもその硬さが逆に心地よかった。段ボールを毎日扱っているからだろうか、そのざらつきが、柔らかい粘膜をなぞるたびに、ぞくぞくとした感覚が背筋を駆け上がる。

（ああ、彼が、俺に触れてくれている。この感触、この痺れ。彼の手が、俺の体を、そして心を、ゆっくりと開いていく。）

彼の指がヒダの隙間をそっとなぞると、愛液が指先に絡みついて、くちゅりと小さな水音が鳴った。彼の指が一瞬止まる。

「痛いか」
「痛くない。気持ちいい……です」

（彼が心配してくれてる。俺を傷つけたくないって思ってくれてる。その優しさが、俺の快感を何倍にもしてくれる。）

彼はほっとしたように小さく息を吐くと、もう少しだけ指を動かした。人差し指の腹が、小陰唇のひだの一枚一枚を、まるで花びらをめくるみたいに丁寧になぞっていく。そのたびに、「くち……くちゅ……」と断続的な水音が響き、粘性を増した愛液が彼の指をぬらぬらと濡らしていく。

「ここ、どう？」
「やさしくされてるのが、すごく伝わる……っ」

（彼が、俺の反応を確かめながら、一つ一つ丁寧に触れてくれる。この人が、俺の体と心を、こんなにも大事にしてくれるなんて。）

彼の指が、窄まりのすぐ手前まで来た。まだ入り口には触れず、その周囲をくるくると円を描くようになぞる。焦らされているわけじゃない。

（むしろ、彼が俺を傷つけないように、慎重になってくれているんだ。）

彼のほうが慎重になりすぎて、なかなか奥へ進めないでいるのがわかった。指がかすかに震えている。

「怖いですか？」と俺は思わず聞いた。

（彼が、俺のためにためらってくれている。俺を傷つけたくないって思ってくれている。そんな優しい彼の気持ちが、俺の体をさらに熱くする。もう、どこまででも行っちゃいたい。彼となら、どこまで落ちてもいい。）

「……当たり前だろ。お前を傷つけたくない」

「傷つかない。だから、もっと触って」

（彼に、俺の全部を受け止めてほしい。彼の手で、俺の奥まで探ってほしい。）

俺がそう言うと、彼は顔を上げて俺の目を見た。その顔があまりにも真剣で、でも少しだけ困っているみたいで、胸がぎゅっと締め付けられる。彼は一度だけ深呼吸をしてから、指を窄まりにそっと沈み込ませた。

第一関節が、ゆっくりと入ってくる。くちゅ……と愛液が泡立つ音がして、彼の指が生温かく包まれた。内側のヒダが、異物を優しく締め付ける感覚に、俺は思わず「ん……っ」と声を漏らした。声が少し響いて、慌てて唇を噛む。

「声、出していいんだぞ」
「でも、近所……ッ」

（もっと声を出したい。彼のために、もっと。でも、彼に嫌われたくない。）

彼は答えずに、もう片方の手を俺の口元にそっと添えた。大きな手のひらが、俺の唇の前にそっと壁を作る。

（ああ、この人は、俺の全部を受け止めてくれるんだ。声も、吐息も、羞恥心も。彼の存在が、俺のすべてを許してくれる。もっと、もっと、彼に深く入り込んでほしい。彼の指が、俺の体の中を掻き回すたびに、彼への愛情が、とめどなく溢れてくる。）

彼の手のひらの匂い。雨の匂いと、段ボールの匂いと、紙の匂い。そして彼自身の体温。俺が吐息を漏らすたび、その熱い湿気が彼の手のひらに当たって、跳ね返って自分の頬に触れる。

「これで大丈夫だろ。無理に我慢しなくていい」

（彼の優しさが、俺の理性を溶かしていく。もう、我慢なんてできない。）

彼の手のひらが口元を覆っているせいで、吐息のすべてが彼の手に吸い込まれていく。まるで彼が俺の声ごと受け止めてくれているみたいで、それが嬉しくて、腹の奥がさらにきゅんと疼いた。愛液がまた溢れて、彼の指をさらに奥へと導く。

「もっと、入れていいか」
「……はい」

（もっと、もっと奥まで。彼の指が、俺の全部を埋め尽くしてくれるなら。）

彼の指が、ゆっくりと奥へ進む。窄まりを通過して、膣の前壁—ざらついたGスポットのあたりに、指の腹がそっと触れた。最初はただ触れるだけ。指紋の凹凸がざらつき帯をなぞるたびに、尿道の奥がきゅんと疼いて、甘い痺れが下腹部に広がっていく。

「っは……そこ、んっ、いい……ッ」

（ああ、彼が俺の気持ちいい場所を、こんなにも正確に、優しく、そして容赦なく攻めてくる。この快感は、彼だからこそ。他の誰にも、こんなに深く感じさせられない。彼の指が、俺の全てを支配していく。）

「ここ、なんか違う感触する。ざらざらしてる」
「そこ……気持ちいい、です……ッ」

（彼が、俺の体の秘密を一つ一つ暴いていく。それが、もう、たまらなく興奮する。）

彼の指が、Gスポットを断続的に圧迫し始める。指の腹で面をじんわりと押し潰し、ゆっくりと引き剥がす。そのたびに、ずぷ……、んぐ……と粘着質な音が響き、膣壁の一点に強烈な圧力が集中する。まだ完全なリズムはつかめていない。時々角度がずれて、指の関節が内壁に硬く当たるたびに、「ひゃ……ッ！」と鋭く息を呑むような快感が俺の腰を貫いた。

（ああ、これだ。彼にしか引き出せない、この強烈な快感。彼の指が、俺の体を、そして心を、完全に捕らえていく。）それでも彼は、俺の反応を確かめながら、少しずつ、少しずつ、動きを覚えていく。

「んんっ……！ そこばっかり、はぁっ、く、くちゅ、くちゅ……ッ！」
「あ゛ぁあッ……♡ んんっ、くぐッ、い゛いぃいッ……！♡」

（彼の指が、俺の気持ちいい場所をピンポイントで攻め立てる。もう、何も考えられない。彼の指の動き一つ一つに、俺の体が、心が、深く反応していく。）

愛液がどんどん溢れて、彼の指の動きを助けていく。指が完全に根元まで沈み込み、奥まった空間をノックするたびに、「ぐぽっ、ぐぽっ」と最深部で粘液と空気が攪拌される水音が、耳の奥で生々しく響き渡った。大量に分泌された半透明の愛液が、指の根元から手のひらへと溢れ出し、会陰部を乗り越え、内腿をずるりと滑り落ち、膝の裏まで熱く湿らせていく。

「すごい、濡れてる」

「……っ、言わないで」

（恥ずかしい。でも、彼にそう言われると、どこか誇らしい気持ちになる。彼が俺をこんなにも感じさせてくれている証拠だから。）

「言うよ。お前が感じてくれてる証拠だから、嬉しい」

（嬉しい、そう言ってくれる彼の言葉が、俺の心を深く満たしていく。彼が俺の快感を喜んでくれる。それが、何よりも嬉しい。）

彼の指の動きが、少しずつ確かなものになっていく。俺が「そこ」と声を上げる場所を何度もなぞるうちに、彼は完全にGスポットの位置を捉えた。指の腹でざらつき帯を面でじんわりと押し潰し、ゆっくりと回す。その強烈な摩擦と圧迫により、尿道の奥がきゅんきゅんと激しく痙攣し、尿道括約筋が意思に反して緩み始める。膀胱の充満感と尿道口のむず痒さが混濁し、尿なのか潮なのか判別できない焦燥感が俺を苛んだ。

「あ゛んっ♡ は、激し……い゛ッ！ くふ……♡ おかしく、なるぅッ♡」

（もう、我慢できない。彼に、俺の全部を、見せてしまいたい。このまま、彼の中で、溶けてしまいたい。彼が、俺を、俺の知らない場所へ連れて行ってくれる。この人が、俺の全てを支配している。それが、もう、たまらなく愛おしい。）

膣口からは、指の往復運動に合わせて白く泡立った愛液が勢いよく溢れ出す。尿道口の周囲は熱く腫れ上がり、透明な潮が今にも決壊せんばかりに滲み出し、小陰唇の上で一筋の輝きを放ちながら、ぴくぴくと小刻みに震えていた。

「んぐ……ッ、それ、つよ……ッ」
「痛いか」
「ちが、気持ちよくて……いく……い゛くぅ♡」

（彼の手で、彼に、イかされる。もう、どこまででも行ける。）

喉が震え、濁った声が彼の手のひらに吸い込まれた瞬間、彼の指がピタリと止まった。そして、最高潮の手前でゆっくりと奥から引き抜かれた。

密着していた粘膜と指が離れる瞬間、「ずるり……」と重い密閉が解ける音がして、先端からどろりと糸を引いた愛液が太腿を伝い落ちる。引き抜かれた彼の指の腹は、俺の分泌液でぬらぬらと光っていて、その下品な光景にまた腹の奥が疼いた。

「今日は、これくらいにしとく」
「……え？なんで、ですか」

（え、嘘？ 止めるの？ もっと、もっと彼に触れてほしいのに。）

「無理させたら、意味ねえから。お前、まだイったことないだろ。ちゃんと準備してから、次にちゃんとイかせたい」

彼はそう言って、俺のスラックスを元に戻し、立ち上がった。膝をついていたせいで、制服の膝の部分に少しだけ皺が寄っている。彼はそれを気にする様子もなく、俺の愛液で濡れた指を、無造作に自分の制服で拭いた。

「……また、明日」
「また、明日」

（彼が、また明日来てくれる。それだけで、俺の心は満たされる。彼の言葉一つ一つが、俺の生きる理由になっていく。）

配達員が玄関を出て行く。雨はまだ降り続いていた。俺はたたきに座り込んだまま、自分の股間の熱を、彼の指の感触を、いつまでも反芻していた。

配達員が帰った後、俺はしばらく玄関のたたきに座り込んだまま、動けなかった。

股間にはまだ、彼の指の感触が残っている。大きくて、少し硬くて、でも優しかったあの指。ヒ

ダをそっと押し広げられ、粘膜に直接触れられた瞬間の、あの熱。愛液が溢れて、彼の指を濡らしてしまったあの感触。膣口からとろりと愛液が溢れ、大陰唇の内側を伝う感触に、ぞくぞくと全身が震えた。

（触ってほしい、って、俺、自分から言った……。あんなに濡れてるの見られて、指まで入れられて……っ）
思い出すだけで腹の奥がきゅんと疼き、蜜がじわりと溢れ出す。俺はふらふらと立ち上がり、寝室へ向かった。カーテンを閉め、ベッドに仰向けに倒れ込む。スラックスと下着を膝まで下ろすと、もう隠しようがないほどぐっしょりだった。小陰唇は愛液でぬるぬると濡れそぼり、透明だが粘性のある分泌液が、膝の裏まで到達するほど大量に溢れている。ヒダの内側は光を反射して、濡れた真珠のようにきらめいていた。

指をそっと割れ目に這わせると、まだ彼の手の感触が残っている気がした。親指と人差し指の腹でクリトリスを包み込み、彼がしたように、骨の上からじんわりと圧迫する。

ぱんぱんに充血し、熱を持ったクリトリスがびりびりと電撃のように疼く。さっきの「ずぷ、んぐ……ぐぽっ、ぐぽっ……しゅご、しゅご……」という複合的な攪拌音が耳の奥でエンドレスにループし、彼の手のひらの、雨と段ボール、そして俺の体液が混ざった匂いが、まだ鼻腔の奥に硬く、熱くへばりついていた。

「ん……っ、はぁ……あっ」

（彼が、俺をこんなに感じさせてくれたんだ。彼の指を、彼の温かさを、俺自身で再現する。それだけで、彼が隣にいるみたいだ。）

声が漏れる。誰もいない部屋で、俺は彼の手を再現するように、自分のクリトリスをぐりぐりと押し潰した。彼の低い声を思い出す。大きな手を思い出す。「怖くないか」と聞かれた時の、あの優しい目を思い出す。

「っは……そこ、んっ、いい……ッ。……っ」

（あ、俺……いま、あの人の名前呼びそうになった……っ。恥ずかしい……でも、止まれない……。彼に、彼の全部に、もう、囚われている。）

クリトリスがぱんぱんに充血して、指の腹に押し返すほど硬く勃起している。もう片方の手を膣口に沈み込ませ、Gスポットのざらつきをじんわりと圧迫した。指を二本に増やし、自分の中に沈める。くちゅ、ぐちゅ……という粘着的な水音が響き、白く泡立った蜜が指の根元から溢れ出した。

「あんっ、はぁ……もっと、奥……っ。んんっ……！ だめ、そこばっかり……はぁっ」

（彼が、俺の気持ちいい場所を知ってくれた。彼の指は、ここまでは入らなかった。でも、明日もしまた触ってもらえたら、もっと奥まで、もっと強く—。彼に、俺の全部を捧げたい。）

彼の指は、ここまでは入らなかった。でも、明日もしまた触ってもらえたら、もっと奥まで、もっと強く—。

（彼に、彼の全部に、俺はもう夢中なんだ。）尿道の奥がきゅんきゅんと痙攣し、膀胱のあたりに甘い痺れが溜まる。尿意と混同する切迫感に、思わず腰が浮いた。

「くッ……♡ あ゛ぁ……んくッ、いい゛……ッ♡」

（彼に、彼の手で、俺をイかせてほしい。彼の全部で、俺を満たしてほしい。もう、理屈なんてどうでもいい。彼が欲しい。）

指をさらに深く、子宮口の近くまで一気に押し込んだ。コツン、と硬い一点に触れた瞬間、背筋に強烈な電流が走り、尿道の奥がきゅんきゅんと激しく痙攣し始める。

「あ゛ぁああッ……♡ はぁんっ、奥ぅ……い゛く、かも……♡」

（彼に、彼にイかされる。この快感は、彼にしか与えられない。彼に、俺の全てを捧げたい。彼のものになりたい。）

（あ、これ……もうだめ……っ！ いっちゃう、いっちゃう……ッ！）

限界まで溜まった切迫感に、指の動きをさらに速める。ぐぽっ、ぐちゅっ！ と激しい音が鳴り、膣口から溢れた愛液がシーツに手のひら大の染みを作っていく。

「あ゛っ――！！♡♡」

（ああ、彼にイかされた。彼が俺を、こんなにも深く感じさせてくれた。この喜びは、彼なしではありえない。）

視界が真っ白になる。尿道を熱いものが駆け抜け、無色透明な潮が勢いよく噴き出した。水に近いサラサラとした液体が、シーツをぐっしょりと重く湿らせる。全身がガクガクと痙攣し、俺は白目を剥いて、舌をだらりと垂らした。

「あ゛んっ♡ は、激し……い゛ッ！ んくぅ〜〜ッ♡♡」

（彼が、俺の全てを、こんなにも満たしてくれた。この快感と幸福感は、彼がいるからこそ。俺は、もう完全に彼に依存している。）

潮吹き後もクリトリスは脈打ち続け、尿道口からは最後の一滴がぷくりと膨らんで、とろりと垂れ落ちる。

（ああ……明日も、また……彼に、触ってもらいたい……）

静まり返った部屋に、俺の荒い吐息と、シーツから滴る愛液の音だけがいつまでも響いていた。彼に触られただけで、こんなになってしまう自分が少しだけ恥ずかしくて、でもそれ以上に―明日が、待ち遠しかった。

（彼の存在が、俺の全てを変えてしまった。もう、彼なしでは生きていけない。彼に会えるなら、どんな恥も、どんな困難も乗り越えられる。彼が、俺の全てだ。）

再配達の時間が、いつもよりずっと遅くなった夜。外はもう暗く、雨は上がっていた。インターホンが鳴り、俺が玄関を開けると、配達員は昨日と同じようにたたきに上がり込んできた。でも今日は、荷物を持っていない。

「今日は、ちゃんと時間を取ってきた」

彼はそれだけ言って、俺の目をまっすぐに見た。

（彼が来てくれた！ 荷物じゃなくて、俺のために！ 俺の全てを受け止めに来てくれたんだ。ああ、彼が、俺のために。俺の全てのために。この人の声、この人の熱、この人の腕。全部が俺のものになる。ああ、夢みたいだ。こんな幸せなことが、あっていいんだろうか。）

心臓が跳ねる。昨日、彼の指を思い出しながら何度も自分を慰めた身体が、彼の低い声だけでじんわりと濡れ始める。彼は俺の手首をそっと握り、自分の胸のほうへと引き寄せた。

「こっちを向いて」

正面から抱きしめられる。

（彼に抱きしめられてる。彼の胸が、こんなにも温かい。彼の心臓の音が、俺の体に直接響いてくる。ああ、このまま死んでもいい。彼に抱かれて死ねるなら、本望だ。）

彼の胸は厚くて、制服越しに心臓の音がドク、ドク、と直接響いてくるほど近い。彼の大きな手が俺の頬に触れ、もう片方の手がそっと腰に回された。

「今日は、最後までしたい。でも、無理はさせない。嫌なら、いつでもやめるから」
「……嫌じゃない。してほしい。全部」

（彼の全てを受け入れたい。俺の全てを彼に捧げたい。彼になら、どんなふうにされてもいい。）

俺が正直に答えると、彼はほんの少しだけ息を吐いて、それから俺をゆっくりとたたきに座らせ

た。彼も膝をついて、向かい合う形になる。スラックスと下着を優しく膝まで下ろされ、外気に触れた股間から、愛液がどろりと溢れて太腿を伝った。

（彼が、俺の体を、こんなにも丁寧に扱ってくれる。俺の全てを、彼が望んでくれている。）

彼が自分のベルトを外す。ずるりと現れたものは、想像していたよりもずっと大きく、太く、血管が浮き上がって脈打っていた。

「……入るかな」

俺が思わず呟くと、彼は少しだけ笑った。

「無理なら無理って言って。ゆっくりにするから」